



古今  
奇談

北史草紙

一



古今奇談前編

送子紙

浪花書林

稱龍堂  
揚芳堂

隣りの方正先生余が文房子飲む侍小英子子の  
の葉あるを把り腕子其目を見て是城を去て云  
足下徳に小どもあまを人の志ありは越後の  
義子目を厭ふ魚一余酒を肴を肴て笑ふ魚  
等ふ先生の言是か余余よと此女の爲に  
説あり彼釋子の説るは此子が此地に怪徳  
よして子教とある徳の物語ハ巨葉紙設けて  
志を見し人情乃る巨葉とあるは意好草  
紙ハ怪徳初子あるが如く小ども母を遊する  
能く是子徳を傳すとの母大進を感て子人

之こ一ん見み身みをいむ人ひとハあをを文ぶんををむむ明めい教きやうふん  
 とあるる人ひとをを悦えつ登とう乃な因いんをを如に珠しゆと  
 一いをを啓けいをを出しハた人ひとと交るる若わも珠磨まの  
 意い休きうをを礼らいをを生せいじ易し重玉ぎよくの巨耳みみ  
 悦えつをを如に謂いはれ遠えん海かい千里せんりの之人ひとの主ハ余がお  
 雙たごイと利り竹ちく馬ばをを鞭むちホー夕ゆう影かげ隨ずいと遷スルし  
 物ものもり子こ留りゅう不ふ形けい乃な維いるるがどく意姓せいも久  
 余よハ齊一いつ取との民みて耕かういと不かたは西日び  
 此こ閑かんの時は以茶ちや紙しをを祀まつて回社しゃ中ちゆうの茶味あじを  
 代よるの中ちゆう意いとす原げんとり共あいはんは花はなて後也せい歸き

竹たけの物もあるるはといふとも以この一義ぎ氣きの新きし  
 をを出しハ者より早常じやうをを回わて時の政と急り  
 乃な洗せんの者試しめてあををと至令れいの者又また秋あき  
 乃な深ふかをを出し其その礎いしのひがたるるの近き近をを思おもふに由よし  
 其そのハ鄙言げんをを予よて俗の儀とたるるををこれこり義  
 一いをを以この義ををむる何なにをを其その衣えの禮をを  
 深ふか更さらをを若わるるの如とあんとと至路ろり若子し至し  
 一いの意をを成せいなるる若わこい子し是これを不ふ考かうりて又また  
 餘あまりあり此この二人にん生せいて情勢せいのるるを一い掃ほうへ採む  
 一いをを悦えつをを心しんををけし禮らいとも風ふう雅や乃な詞しをを疎そ

○英廿五十年前 序

が者よと只候に遠くはるき海より人とあれども  
市街の通に遠くはるき海より人とあれども  
の草紙を紙を綴るの君子の心を花を花  
よいて英の道をも尋ねるものか  
る生の草紙を綴るものか

寛延己の初夏十ヶ箇の主人  
十ヶ箇上子草紙を撰る



古今奇談英草紙惣目録

近路り者 著

子守浪子 正

第一篇

後醍醐帝之御成敗乃法と折信

第二篇

馬場求馬書と況へ種口が聲と水活

第三篇

豊原兼秋音と睡く國の盛衰と活

第四篇

運川源を至山より今道を得る活

第五篇

紀任重隆司より到る津嶽と新る活

第六篇

二人乃妓女越と異ありて各名と成活

第七篇

楠浮正丸樹の我より歌と判る活

第八篇

白水氣が賣ト直言奇とある活

第九篇

多武前子輝と出ると媒とある活

以上九篇

古今奇談英草紙第一卷

① 後醍醐の帝之まじり殿の法を折治

まてのこころしうらふこのけうのふふささき  
 万里小路殿の直房の子あり知りぬぐお多と漢博  
 宗隆化和漢の文を留て早く英内侍節とある建武の帝  
 命じて尚書と海せし先よりふうくまを解ゆりしを  
 帝深くまじりとせしむるにたはせしめぬ法の要小帝  
 武家の子らり種をせりお打つても殿先はほひなる也  
 是のふと帰とあるは時速水下所ちとありそのりる冬  
 少くは助を能が一族あるが友軍は落しそより東國  
 たりしこふせりまより云一統の時を待て起りや  
 是のふとついで天を親しき速水が幸ありけん  
 敷急るりしは打つめくお後りるは一ヶの法と完行の事

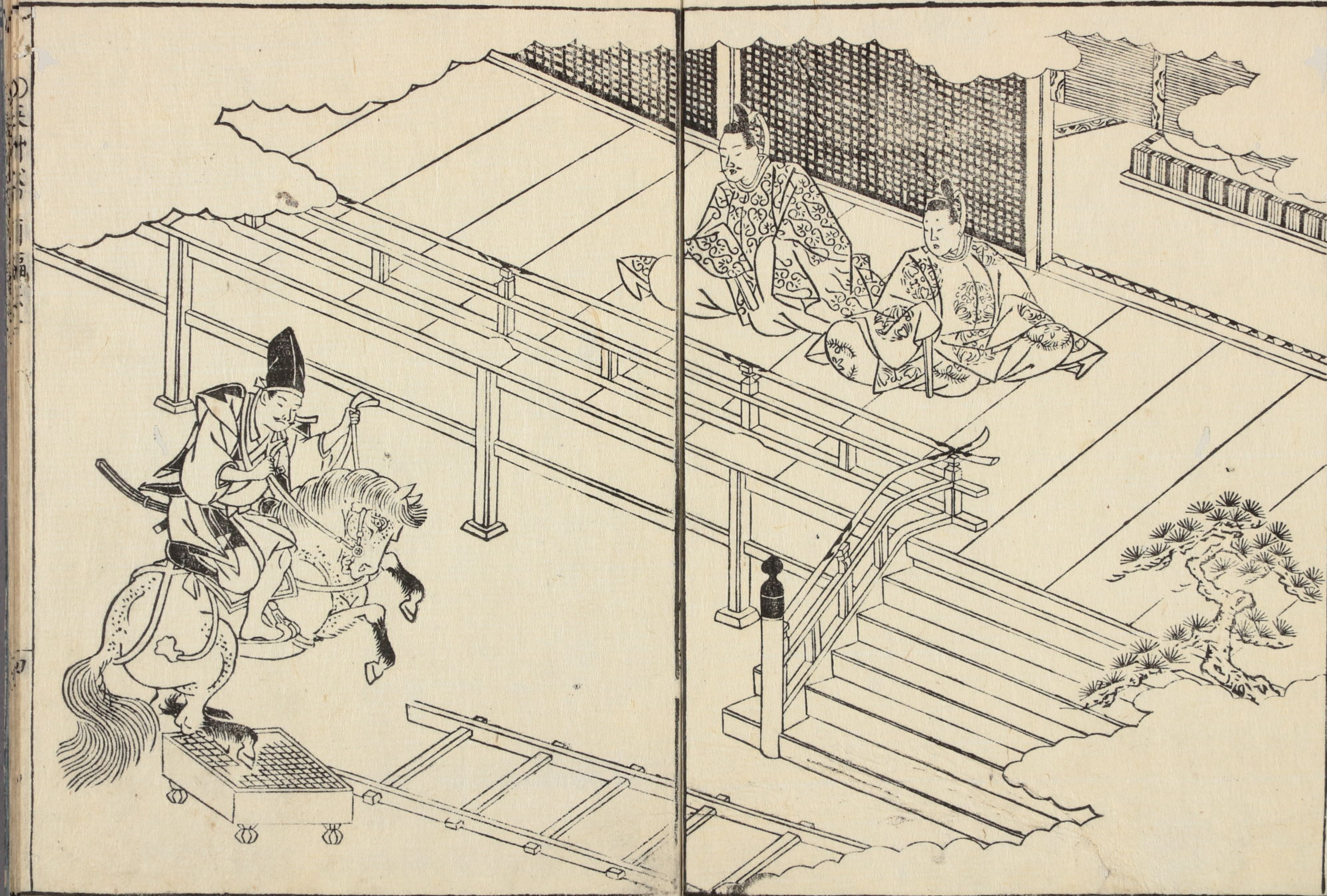


際をあらりたる水乃流るるやよはれぬれどもあはれなるは  
 ともはれりともくじりやなればむしりや水と名づけぬと  
 り飯房んはきそ遊の名古きりややと同のいけむ云々  
 ころりのもゆるりけりハ是も名はの内そあけはけりありとり  
 ある遊水ゆと古かりゆけり色しうしゆのりゆと名づらふか  
 こそ別世ぬ飯房ゆよあはれりゆと速水は湯にけりあかりて  
 遊水は古き名あはれりゆとゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 け水乃とある古かりゆといひ合さぬゆ林のまげきいよと我  
 秋多うとくと自服の秋とを和くあまらるんよとの殿もあは  
 かりひあはれんはあはれりゆとあはれりゆのりり父宣  
 け事ととれぬと直名ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 朝臣の秋とと遊水はあはれりゆと深く秘せりゆと投棄といへる集もあ

かりとすて飯房いふく我兼忽とるの内りとあはれりゆと  
 もりゆあひあはれんはあはれりゆとあはれりゆとあはれりゆと  
 時大内裏とと不造言とととむ飯房あはれりゆと凍とととととと  
 事ゆとととむとととととととととととととととととととととと  
 馬場飯と建て遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊遊  
 多し遊遊佛教と名とあひゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 くの院まても後法種と没けて法と後後ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 男女の席礼とととととととととととととととととととととと  
 て異國を羽ともは仏教は深し一國をりゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 はくさりゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
 りゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

一葉抄 卷之二  
 三





英州政前編卷一

英州政前編卷一

一ハ弘法よりかきては益を時と皆害あり佛法も國の害より多  
 害依せぬと深有よりきこととうしむ弘家の方便ハ國政よき益  
 あきこと汝が説ともうは彼佛法説法檀て開ても或ハ天下ハ害と  
 なることと満る時ハいふことまよしゆんやまじも性古の佛法  
 之ハ佛法もいふ公政もいふ弘法今ハ佛法ハ偏諛のの多  
 形ハ國法と害すると逐近世ハ佛小雅俗乃分也中りて中ハ佛  
 ある佛の弟子を招教して宗依の深きを教し佛法を教養り  
 招く惟く一の終は弘法と成就するあれど今の佛法の佛留あり  
 後す一ハ弘法を説く説法といつてととて清淨の法乃教  
 きむ二法をよるりさるは為善の道とくしと同一事なりやを  
 惟くすこいで教んるものゆかくは後法若も佛法ハ惟く  
 務ハ膝おも板かぎる目ハひきこらるるを焼のふむく檀とく  
 然て法衣の脱とくげを産きくもの希後と慕り巧は自己が衣料とを  
 観音の小像と賭さく福計とるふりさるけ作の筋ト同前の弘法を  
 徳一の一人として大義のワとさる人あるものかたれば人とならるる後法の  
 邪智もかき汝が人の屋ハ天下のくは善業者おもして抑小の  
 あらあんと歎さるるなりしある所と爲くハ佛法ハ外よる耕して  
 吟ふもの多くなりて年々其學問の道は能くして能くさるるの  
 公らるるよりけて後見の識論とくし人氏ハ口を迷とやとせし  
 然も此れも理而行きく政府の害とあれは佛法ハ如の教を人奉  
 の病室が佛者と埋れせとも深きことありて天下ハ其もその  
 百姓と伶俐者のありありと善といふもつご人抑りあり而て  
 たりたりと人依佛の法を人百姓の愚痴明しとのありありと

然て法衣の脱とくげを産きくもの希後と慕り巧は自己が衣料とを  
 観音の小像と賭さく福計とるふりさるけ作の筋ト同前の弘法を  
 徳一の一人として大義のワとさる人あるものかたれば人とならるる後法の  
 邪智もかき汝が人の屋ハ天下のくは善業者おもして抑小の  
 あらあんと歎さるるなりしある所と爲くハ佛法ハ外よる耕して  
 吟ふもの多くなりて年々其學問の道は能くして能くさるるの  
 公らるるよりけて後見の識論とくし人氏ハ口を迷とやとせし  
 然も此れも理而行きく政府の害とあれは佛法ハ如の教を人奉  
 の病室が佛者と埋れせとも深きことありて天下ハ其もその  
 百姓と伶俐者のありありと善といふもつご人抑りあり而て  
 たりたりと人依佛の法を人百姓の愚痴明しとのありありと

悪あらしふ引とて一助ともしたふ一休今とこしくつとさうして  
 又ふと一と倫言の安むる不測多きりあはねむる在房却らるとよ  
 洗ゆ終岡にせし物と退きぬ角浪り明あつる君らねども速遊日  
 日よさうなむとてけ相延治果なくも是た打あつて再三折檻  
 乃使はなむんものよとせひつとらりり一年せり治治判友が  
 許りり証馬ありとて月毛の馬と進奏をもと形頭ハ難はく  
 北背を許りし似く四十二の若毛脊解は速くおの年也よきて  
 竹阪別がごとく雙の眼珍を掛らりと怪まると物卵の別を別  
 留思とて酒の刻系免んこら七十六里騎のとせせるがごとく  
 乃よまらてくる取服ひとせごとくと美をり別たつる案よ春あ  
 る場版り幸ありてけ馬と敷院ありたる孫守とそ氏とらねく  
 曲馬とそあつてむ系人の心よ急せりこと舟常あつては天馬と

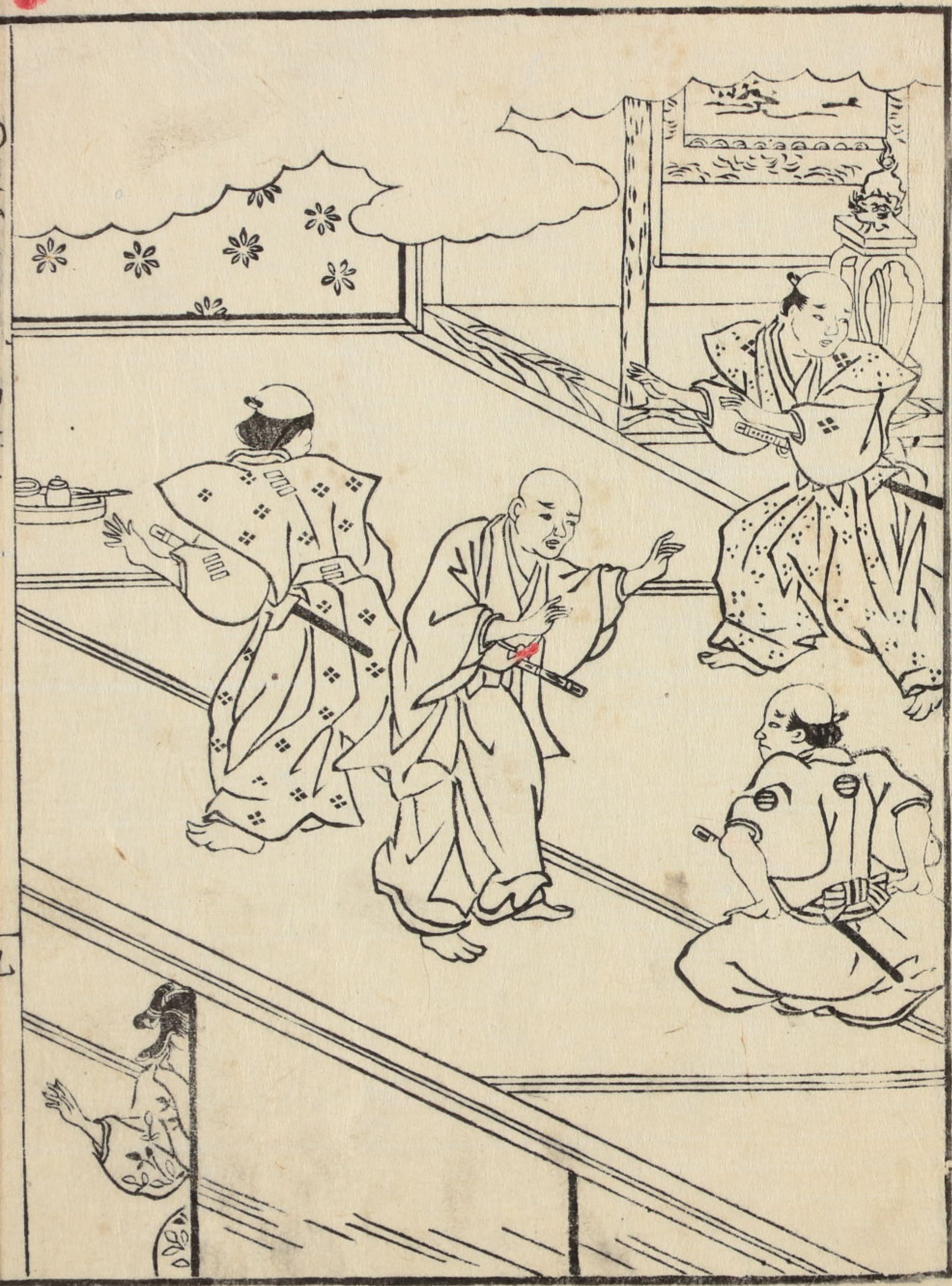
子倉一敷急収と勢よく我たりたるのあつと腹せき幼りた  
 氣と少身ある付たた皆云是若福なり岡の糝玉のせ八疋の天馬あり  
 乞り争く天地のつりも同狂とつり天馬ハ麒麟の類なれば是を明  
 乃はの形もあらりとせがせとせりわつと在房の心よとせゆ  
 ことたるの吉凶を勅問あつた在房すれりり八天馬の本朝よなぬ  
 こと例をけせば若急ハ勅へごとく知もせしけ馬吉半の用とたまた  
 きり漢の文帝の附子室乃馬を献せよ帝是とよ代帝主者  
 日り二十里凶ありは必ず室喜樂前ふりり厩車後よとらりこれ福り  
 子室の駿馬り業とともははるかして帝主何國ハゆらんやと室らり  
 とけりり因後八駿は駕して遠遊を好むゆ堂の礼よなりしは岡の  
 世の善くつとめあり今大礼の後民貴人若て天下いまもあつとら  
 り人との得りとてはつと親政もかく親良言よ阿て國の危つと

中へ大内裏と送り馬場殿と建氏り深設とけ宸襟とほなりし  
 功臣と美ドありども恩賞と切りあうらん忠切空しく悲と合の  
 多し海日天下よあゝの事あし時天子け龍馬り駕しく龍  
 小龍よ遊りよも群臣ハ後とあつた只遠國よ急とあつた  
 用る所あしんのことと是とよき次とて海とまれば法良とを  
 新ド旨酒のさる金も無少とてと運轉の気色ましくして  
 見流して天るとあゝとん休の積との八駿俱り皆同じ馬あり或ハ  
 毛能者矣ある何の書り先と出とてと初らや辰辰一陽とて  
 心ひもどた云同家乃本紀ととありんのことと龍と推せあひ  
 八駿者も能異ありと拾異記り先と出せり因後ハ八駿第一と  
 絶地と名く馳るも蹄地と踐も第二と翻ねと名く行くと死念  
 越りり第三と奇骨と名く振万軍とめて速つた第四と龍

影と名く日の走と遊てり第五と踰懸と名く毛の走の柄  
 輝第六と龍光と名く形一つよしと十の影あり第七と騰霧と  
 名く雲りりのりてらく走る第八と捷翼と名く翼の肉の翅  
 あり積まじハ八疋の馬りたがいよのりて天地のうらよめさうあつと  
 書供ふ今け一馬りの八駿の能と兼りとも朕いんぞ先と遠海  
 乃あり用り相攻と海と名く名細ととてと龍と斬り身と龍乃  
 吉曲たがいあり皆も用る人の獨福吾悪り儂りりのりり休の捷  
 影と名く天下と概と名くとさうれびり親の任城王勇龍駿  
 とてとて龍と換り後世も流とて楽府も製して気  
 とりてと名ん事と名んごんりの馬と名んごんりの馬と  
 是らるハ或とと名んごんりの馬と名んごんりの馬と名んごんりの馬と  
 后のみ色よ速く政よ害あるとと悪めど帝の言よ名んごんりの馬と

ごとく屯屯とて換るごとくは馬より遊凡子里乃能あり  
 美女り沈魚落尾の容有りあはくは君二つあづき喜々として  
 ざんしとて希希屋よの病と云ふ南の遊人よ深くかくけ内也  
 情懐を以てそと歴しと欲く你沈魚落尾の四字の如くあは  
 為屋言沈魚落尾の字ハ唐の宋之間の流紗錦を云ふ  
 て松羅又魚畏て荷花に沈と云ふ一よりあはく美女魚を  
 とりて感むると云ふ希希屋よ若て宜ふ你知れば沈魚落尾  
 と美人の佳称と云ふハ元氣深ある事と此向藤園氏の作  
 如く毛嬌羅眼ハ人の眼が美人あはくも魚ハ人のけいふふらぬ  
 深くうら種も人もふ近うれいさく能くあはく人の世もさ  
 魚鳥とて特別あはくことといつる向たり後世特ド深  
 美人の稱は你故事といふと朕と初るとあはく今將家

う下り年と積屋一今日けり傷屋ハ遊園の地あり女你が  
 と同定めは抄延よありてけり言とあはく罪を同づることあは  
 ごとくと洞窟り言くとその日の所遊ハ板やぬ屋屋は筆よ遊て  
 歎して回浪世乃期呼やんやうふとと智ハ奪り用ハ弁ハ非と  
 慶よ是るや友あはの言動とつごよあはくと也よ自あを辯て  
 小ふり下よ去てうらび希希屋よあはく又の宜屋の字ハ活して  
 是を求遠うらむまでも是ららしめりあはくはなりあはぬ  
 ②馬場求馬妻と沈て樋口が聲と水活  
 天文の氏ハ別觀音寺の塚ハ依りあはくハ人の要害とて城下の民人  
 七國との勢あり餘元とあはくして隣あはくよその法儀もかけせと國  
 中あはくして高賣家業よあはくハ市町賑波四民枕とあはく下て  
 筆ハ知れども貧富ハ人の命あはくはけ下とあはくもとあはく是



英州系前編卷一

多く又と馬と賃領して馬匹と稱するものあり格代け匹と云  
 ありて代り馬より多と小ラト云々のを食より毎月常例の役給と  
 たり網裁はる者の尺人の趣なき時ハ路より種と考て喜ひ取乃取  
 肉より集りゆく半後草種と造りて例儀の役とんけし教  
 馬匹の家漸く解後て家買はひ格業と改る半と出を地と求  
 め回とゆふ及てもい馬匹の名目とのべれねど而此町人ノ交  
 りあつた市ノ途とめてもこがの下の乞食より所ハ少  
 の教ひする人ねし門とぞら家内よりうて氣遣言ふ如き世  
 りいやし馬の場家淑優ハ類はく入つた馬別の目とゆく馬  
 しそに情くれし時ハはあつた小つた馬と老義ししよせおの志氣  
 りりて馬匹の種と折揚大ニは造りて是と小下と改定とせと馬  
 々の道しと法石津島とひひ路へ一方城家四島とて皆別家子

陸身して梅りかもし馬のりよらづらひととせの人言改めど  
 津島とえれ前の馬匹とぞや津島年みす一除り年七七年  
 以前ト述て男子ハかく一人の女より何名と幸とよふ形がらハ家  
 がりよもせられ梅り教ひかくととらりられ津島島をさるる  
 昔年の津のじくたらゆよよとぬむ奇のりよととせととと  
 此をいさぶトぞふりてとをらるはくこさ情事ども後習ひ  
 法家の法と家教ハ甚厳と極め津島と向ハ海あり  
 こ外法家の集執撰の勢とるゆと云書り後らるる所一津島  
 女の才と自惚しと町人百姓の中を細づと婿をととんけけ  
 せども家風のり知ざるとのせけれハ作入積せんとしてこの中ハ  
 阿幸十八早御とゆふとを海の中そのつて夏り隣家のとの言次  
 て老蘇の里ハ馬場求女として一人の徳人ハ祖おのる若りて

英州學前編卷一

かくす子も有れども又中よりよく後れきあはるしく二すよ近はけ  
 ども定る書も似くたふいゆあま入替して成るもあはれの感と  
 靴一今の何さのあまんと起さして靴小人あり息女とあはるる  
 あはるるやちし子澤慈あまのものと笑へぬもと女とあはせて  
 彼があまとい起さば我あま修小面目とあはるるやちし子澤慈あ  
 定して彼澤あまのあまんと靴そ馬傷に入ちし子澤慈あまあま  
 皆あま修りすそて足下あまあまのりて小修あまあまあまあま  
 て町あまのあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 今夜あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 この礼せりあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 彼あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

かくとあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 瀬のあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 今夜のあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 皆あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 この礼せりあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 彼あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
 あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま



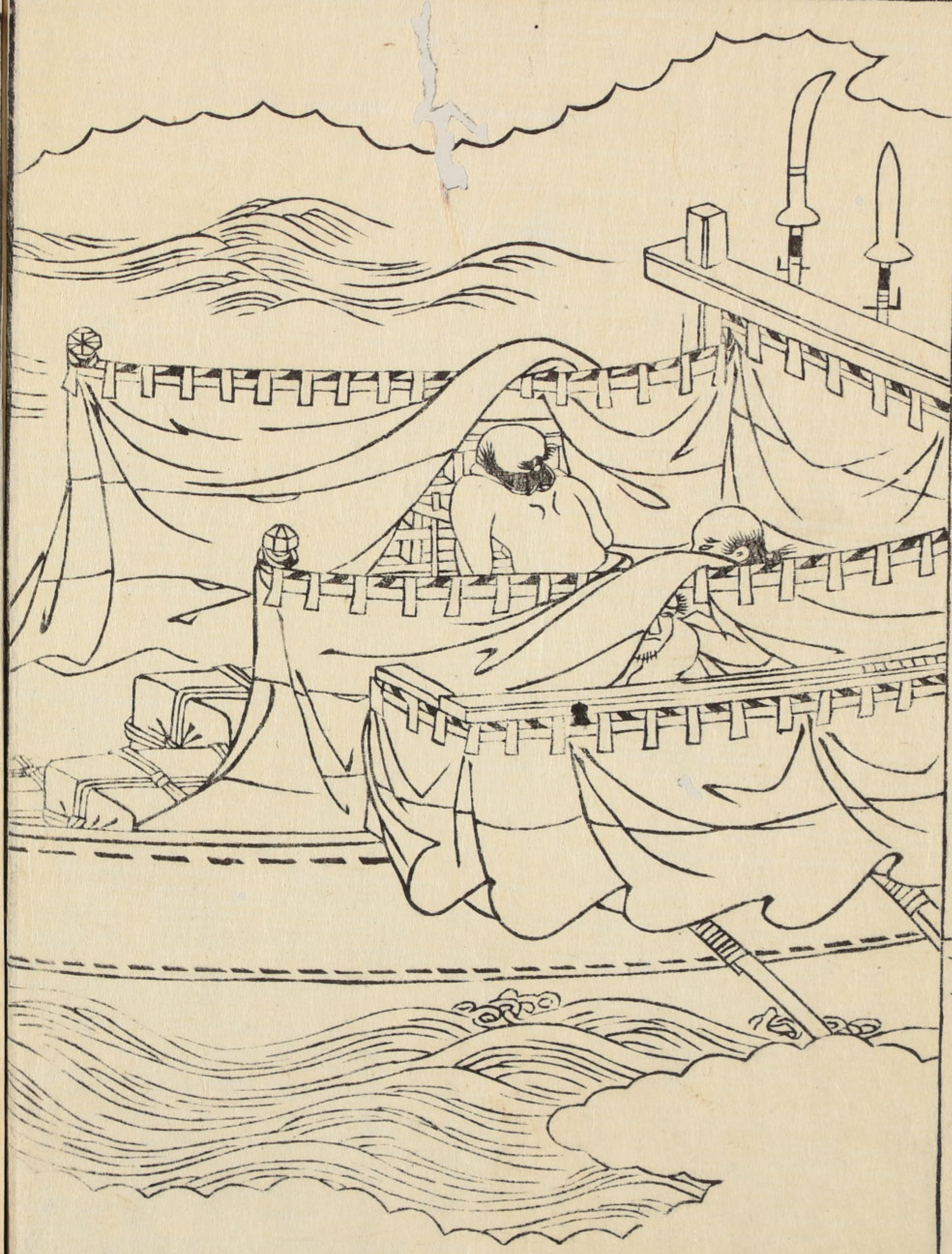
一海ぬともあらん破傷をんと應と接びつぎ竹杖破槍と  
ゆる接連れり中よ形と代緒有る形をて應作とて  
地と首神は纏せ洋流は破屍とありて松子とやて奉家  
ももつおのがさゆくとその糸の糸道窮鬼に隣地のみをかり  
てもあつる事細し

小うとてよくは海霧の岸よ秘ま入る天多と下して親一と海音と  
あつたひ舞どのは舞面せんとはぐとみ七人の家も肝と信ぶ  
おあつる末馬もさゆりうお事よあひ朋友はは種く進うらぬ  
浄意とさる極きく小うとも向いたる日舞が振るうくして我振く  
あよあつた進日海も振て海と信べしと家もあつても海音の事  
あ月とあつて久しぬ幸ハ一たりありて海よりれく夜を信  
末馬も朋友の家よりゆりある浄意も好むまふみて面り

着と合はくお幸と共りり口口口口口口口口口口口口口口口口口口  
末馬が出身の役とよく信國も福りけこの口口口口口口口口口口口  
形ひるるあるハえ末軍機武術の家ある事をも何とも信ひ軍師の  
書を起さしと和漢古今の典と海流し一因家世の家徳の書しを  
考し我家の形も身ても養成するやある事をも我家の念も考  
けし一考りんと用するのやとありたる世の中軍術と信じて  
録しあるもの多しといども尚付高名名の軍家口口口口口口口口口  
を捨てぬよお禮よありて我日より又とるもの信とさるうら  
るゆり一は友の信とありて其役にす海音は尚付軍家の  
姻家として考守さたるは尚付武田信玄よりある子二百貴  
の技持と信りまるといふお海音も子孫御國より移るる世の  
教命あり是も偏し又祖馬傷何事か世より名と去るれらと

ひのりよ夫養父浄慈が御支まよるものあり母の人たるべし一人  
 及後帝おささるる是則常ありうを求馬に附ありてや馬を  
 今日りる事を知りては此の女婿とあるはとものを乞我修身  
 殿之妻又賢慧ありて七出の條を犯さぬ今又其を絶ゆるも  
 ぶと乞りしを考めぬ妻女の縁よりて名をあるの御とありし  
 といいつら妻水と解て睦月中旬既り若狭は越後多の月  
 舟にて浄慈を設けし舟と送りし附此に子おれをりて門  
 子出りしは観音あり若狭より八湖との役船にけきし書籍  
 新具おと舟は積り馬場又殿後若とあるは案納り舟と御を  
 こそ自航よりく世居りてより向成ありとこそ舟を泊らふ  
 此にも新春すお正月影昼のどく求馬船はわく月をる後  
 去時夜静くそ空をこし都人わくん此は後正のこし

想い出し忽ち一個の悪を起つてそ非の婦人と解して修身の舟を免  
 まんとお幸が願と年受して袖さきよさそひ出と骨をそ一年乃  
 満月の夜ある貴せどんばあぐんことさう隈ある影の如く映  
 せしは流り易き秋影は流るごとく妻が思ひよりあささうひかを  
 極めて一推し水の中は推落しあや水もを鳴おし肝要のことあり  
 快船と聞かす一養美とさうとつや何ふあはぬ方と櫂とぬ  
 ひとぎそ一直し船を二十所さうりやうねおるは西をこめて妻の  
 舟落しとさうり後月をるんと歌へてあは落さうらうの  
 船ととまられども多く沈てえんは早晩魚腹は草をん夜さ  
 船は後とおひ舟方より貴後とあはれは皆くゆねどもを  
 さうりて流り再び舟と回定めぬおとそよ中浦よつとま  
 城よりより流分の人は解くことまは相見えし兼て場り新し後



英州氏中前編卷一



人面ありし引きさうりる場は中よつがきて我り何の罪ありてめい  
 敷弄りや秘檢家の勢と責弄りあわはれと改と築く者り  
 燭臺白首はしくかやき行筆し臍あけりてさうる婦人ハ東の妻  
 女幸かあよあしも遠いなる場臍結き亡妻の悲意ありけり  
 鬼妻と罵るあはれさもあはれさある我罪あり今文  
 謝するよ河あしと影りけりて子傍の女と皆袖と掩光  
 別す時極に真うりて賢婿終とやめよ是こそ其縁國の証  
 中水またらひとと救ひあげて養育し我愛女なり馬場  
 まましくおらきとさねふと擽て我思事あり何るも  
 あつと改とたふよ家きて極口つひ本をわづらぐとさうる  
 めめいといさうお幸婦なる涙と場と罵て云為情の人  
 父親の脚よりつて血染と極口とることをゆく思と思つん

されと水は沈められども天の情ありて今人おひまげられ  
 妻をて義母とんと自何の形あつて你よ見んとととと  
 馬場差漸面り後口の言はさびと情てあまなりわ極口お幸と  
 云今賢婿妙妙深く罪と悔ゆい後敢て你と煙燻とあはま  
 とが面よ先づて悔とあまべ極口お幸もまおてととと  
 妻をておらり幸が情を罵たの文と擽るゆあはれとさうる  
 河とやうけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ  
 密家の罪嫌と悔と支那愛と先ふよ今某縁とととと  
 縁とととと任罪けとととととととととととととととととと  
 の字と縁とととととととととととととととととととととと  
 添く死て面皮と紅めてひとととととととととととととと  
 宿ありととととととととととととととととととととととと

と云ふ父母は〜又觀音寺より淨土とむ〜と云ふて  
孝と盡〜と云ふと云ふ馬場と榎口と好家由緒ある家と  
あり〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ

古今奇談英草紙第一卷終

